

舞台に咲く「花」



(有) 劇団かかし座との共演

いずれの花か散らで残るべき 散るゆえによりて咲くころあれば 珍しきなり
〔風姿花伝〕
能の大成者世阿弥のことばです。「能も住するところなきをまず花と知るべし」と続きます。仏教的な無常観が底流に感じられる奥深いことばですが、能に限らず、舞台芸術の上演は常に定めなきものであり、同じアーティストの舞台でも一つとして同じものはありません。それが舞台芸術という生身の人間が演じる行為の宿命でもあり、またその移り変わっていくところに世阿弥の言う「花」があるのでしよう。舞台芸術とは、そんな儚くもまた生命力にあふ



体育館が舞台となり本物の芸術を鑑賞する

れた花のようなものだと思います。一方、子どもたちもまた日々著しく成長を続けている存在です。大人とてさまざまな経験をとおして日々変容を続けていることとは思いますが、残念ながらすすくと伸びていく子どもたちの比ではありません。子どもの舞台芸術鑑賞とは、そういった変化しつつあるものどうしの「二期一会」の出会いです。ですから、心にまつすぐに入ってくる作品に出会えた子どもはとても幸せだと思えます。反対に、おもしろくない思いを抱いてしまったとしたら……。筆者は、「舞台芸術ふれあい教室」と呼

ばれていた時代から、文化庁の子どものための舞台芸術体験事業に芸術文化調査官としてかわり、現在は「子どものための優れた舞台芸術体験事業」演劇分野の企画委員を務めています。全体の中の一部ではありますが、採択された芸術団体のワークショップや公演も見て回りました。

学校の体育館という明らかに上演場所としての条件に恵まれない場所で、児童・生徒の参加を得て実施するというこの事業の公演形態については、抵抗のある団体があるのもっともなことと思いますが、事業の趣旨は年々理解されてきているように思われ、心強く感じています。演劇などの場合、当然、演目によって子どもたちの参加になじまない作品もあると思います。しかし、各団体ともに知恵を絞ってさまざまなアイデアを考え、共演する子どもたちを熱心に指導しておられるのを見るのはうれしいことです。

「子どものための優れた舞台芸術体験事業」は、予算規模から全国の小中学校の中のほんの一部の学校にしか巡回できません。それでも、一人でも多くの子どもたちが、舞台の上にそれぞれの「花」を見つけられることを祈っています。

(武蔵野音楽大学教授 中川俊宏)